【10の姿】改定保育指針のポイント　幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

10の姿の注意点！「年長が子どもの成長のゴール」ではない

保育園・幼稚園で子どもたちに関わっていると、年長児が成長のゴールのように考えてしまいがちです。
保育園であれば0歳からの成長を経て、基本的生活習慣を身につけたり、友達との関わりの中で心と体が育っていきます。
その集大成である年長児が卒園を迎える時、子どもたちと一緒にゴールを迎えたような気持ちになる保育者も多いと思います。

卒園は保育者にとってひとつの区切りではありますが、子どもたちにとっては人生の一過程です。幼児教育を終えると、子どもたちは小学生になります。
小学校でも勉強や仲間との関わりを通してまた新たなことを身につけ、中学生、高校生……と成長していくのです。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）」は、これまでに別のものとして捉えられがちだった、
幼児期の姿と小学生の姿をつなげ、子どもたちの成長を連続的なものとして捉える際に役立つことが期待されます。

1.健康な心と体

子どもが自ら健康で安全な生活を意識する。心と体を十分に使い、自分がやりたいことを思い切り楽しむ。

人が生きていく上での基礎となる部分です。健康な心と体がなければ、友達とコミュニケーションをとったり、自然の中で思い切り遊ぶこともできません。

活動の中で、自ら見通しをもって健康で安全な生活を作り出していけるようになること、も目標の一つです。

2.自立心

身の回りの環境に積極的に関わり、諦めずにやり遂げる達成感を味わう。

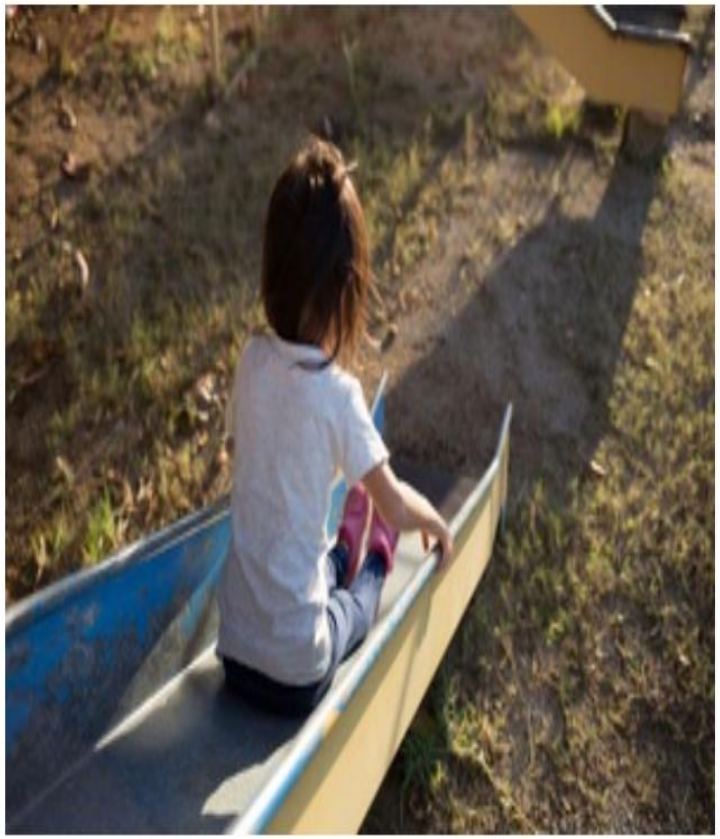
子どもたちが、他人の指示通りではなく、自ら考え、主体性をもって行動するようになること。
周囲の環境に関わり、さまざまな活動を楽しむ中で、工夫していき、自信をもって物事に取り組めるようになることが目標です。

3.協同性

友達と協力し、イメージを共有しながら共に考えていく。
言葉で自分の気持ちを伝え合う。

友達と関わる中で、時にケンカしながら、共に成長し、喜びを分かち合いながら育む「協同性」。
友達と言葉でやり取りする中でイメージを共有し、「〇〇ごっこをしてみよう」といった共通の目的に向かっていけるようになることです。

4.道徳性・規範意識の芽生え



ルールを守る必要性を理解する。
相手の立場になって気持ちを考えたり共感したりする。

してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、相手の立場に立って行動するようになること。きまりを守る大切さがわかり、自分と友達の中で、気持ちの折り合いをつけながらルールを作り、守ったりするようになることです。大人が言葉で伝えて教えるよりも、友達との関わりや園生活の中で、少しずつ道徳や規範意識を身につけていくという視点です。

5.社会生活との関わり

家族や地域の人と関わり、地域社会にも関心の目を向ける。社会生活の中で、役に立つ喜びを感じる。

子どもの育ちの中で、保育園の中だけでなく、子どもを取り巻く家庭や地域の環境にも目を向ける視点です。
家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみを持つようになること。また、「情報」の取り扱いも主要なテーマに含まれています。

6.思考力の芽生え

身近な環境に関わり、様子を観察したり予想したりする。友達と関わる中で異なる考えがあることに気づき、自分の考えをよりよいものに変えていこうとする。

物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気づいたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる視点です。

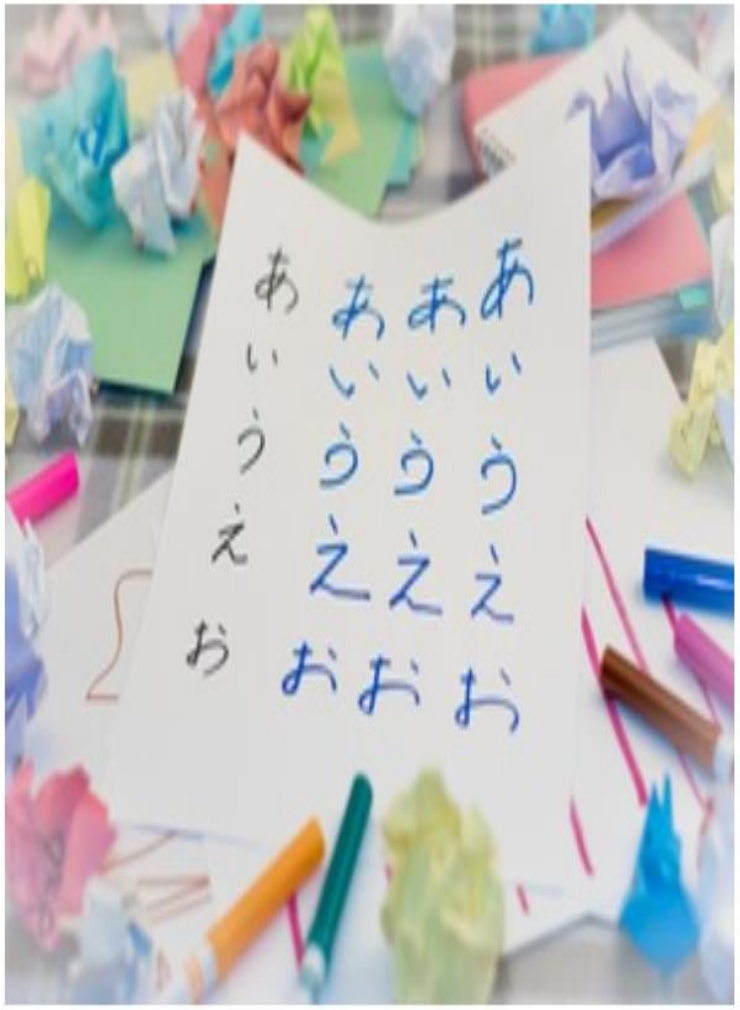
友達との関わりの中で、自分とは違う考え方に触れ、さらにさらに工夫したり、考えなおしたりすることも大切です。

7.自然との関わり・生命尊重

身近な自然物に関心を持ち、感動したり、命を尊ぶ。また、それらを言葉で表現できるようになる。

自然とふれあい、感動する体験を遠し、身近な環境への関心が高まり、面白さに気づくようになること。
保育士は、子ども自身が自然とどのように関わっていくかまで考えられるようなアプローチにつなげていきたい視点です。

8.数量・図形、文字等への関心・感覚



遊びの中で、数量や図形、標識、文字に興味を持ち、豊かな感性と表現につなげていく。

絵本で出会う文字や、友達との遊びの中で出会う「二人で」「3つまで」という数の感覚に、興味関心を持つようになる、という視点です。
保育者は遊びの中から文字や数字に親しみ、ふれ合えるように工夫してアプローチしていきましょう。

9.言葉による伝え合い

絵本や紙芝居などの物語に親しみ、経験したことを言葉で表現する。相手の話を聞き、言葉の伝えあいを楽しむ。

子どもは保育士や友達と心を通わせ、絵本に親しみながら、豊かな言葉や表現を身に着けて、言葉でのコミュニケーションを楽しめるようになります。

保育者は、子どもたちの「言葉で伝えたい」という思いをサポートするとともに、相手の話を聞くことの大切さにも気付かせていきましょう。

10.豊かな感性と表現

さまざまな事象に触れ、感動したことを表現する。また、友達の表現を見て、自分が感じたことを言葉で表現する。

一人ひとりの感じた個性を大切にし、感じたことを表現できる楽しさや喜びを味わうこと、表現したい！という意欲を持つようになる、という視点です。
保育者は先回りして教えすぎずに、その子らしい表現方法を育んでいく必要があります。

保育現場で「健康な心と体」があらわれる具体的な姿　1

＜年齢に合わせて遊び方を変える～ドッジボール遊び～＞

ドッジボールには明確なルールがありますが、最初から子どもたちにルールを教えてゲームを行うのではなく、発達に応じたルールの中で遊びを楽しみ、徐々にルールを覚えて遊べるようにしていきます。3歳児クラスでは「2つのチームに分かれる」「ボールが当たったら外野になる」という複雑なルールの理解は難しいため、「保育者がボールを投げて子どもたちがボールに当たらないように逃げる」という簡単なルールを設定します。
遊びを繰り返しながら、徐々にドッジボールのルールを覚え、5歳児クラスの頃には保育者が介入しなくても自分たちで遊びを展開できるようになります。

保育現場で「健康な心と体」があらわれる具体的な姿　2

＜達成感を味わうことができる仕掛け～なわとび～＞

4歳頃になるとなわとび遊びに夢中になる子が増えてきます。クラス対抗でなわとび競争をすることもあります。前とび10回、後ろとび10回など、目標を定めて練習を始めても、なわとびの楽しさを感じることはできません。子どもたちが達成感を味わえるように、なわとびカードを作り、目標を達成するごとにシールが貼れるようにしました。すると、「次もチャレンジしよう！」と積極的になわとびに挑戦する姿が見られるようになりました。

保育現場で「健康な心と体」があらわれる具体的な姿　３

＜清潔や整理整頓の習慣は、乳児クラスからの積み重ね＞

外遊びから帰ってきた後には手洗いうがいをしたり、食事の後はテーブルの上を綺麗に拭いたりなど、身の回りの清潔や健康の習慣を教えるために、紙芝居やペープサートを使うこともあります。
幼児期の終わりまでにはそういった習慣が身につき、大人に指摘されなくても自ら実践できることが目標です。清潔や健康の習慣は乳児クラスからの積み重ねが重要です。体が綺麗になったり心地よくなる経験を繰り返し、「気持ちいね」「きれいきれいだね」と大人が声掛けをしていくことで、子どもたちも「これは良いことなんだ！」と覚え、自分で実践できるようになります。

保育現場で「協同性」の具体的な事例　1

＜遊びの中で役割分担を決める経験～ごっこ遊び～＞

4歳児クラスでは、遠足で水族館へ行った後から「水族館ごっこ」が流行りだしました。遠足後には思い出に残ったことを絵に残す活動を行い、みんなの前でどんなことが印象的だったか発表する機会を設けました。

そういったこともあり、子どもたちの間では水族館に関するイメージがより深く共有され、ごっこ遊びに発展したのだと思います。「らっこさんと水族館のお姉さん」「ペンギンショーごっこ」など、それぞれ役割分担を決めて楽しむ姿が見られます。

子どもたちのやりとりを見ていると、「僕も水族館の人がやりたかった！」「じゃあ順番でやろう」といった会話がなされています。担任はやりとりに介入せず、子どもたちが自分たちで話し合い遊びを進めていく様子を見守りました。

保育現場で「協同性」の具体的な事例　2

子どもが落ち着いて話し合える環境づくりの工夫～おみせやさんごっこ～

4歳児クラスでは、おみせやさんごっこが流行っています。お花屋さん、車屋さん、床屋さんなど、それぞれの興味に合わせてクラスの中にいろいろなお店ができ上がっています。素材置き場には段ボールや色紙が置いてあり、子どもたちは自由に使うことができるのです。
ある日、Y君とD君が「わたあめ屋さん」を作ろうと意気投合し、素材置き場にある白いお花紙を全部使おうとしました。それを見ていたKちゃんが「全部使うのダメなんだよ！バカ！」と怒り、Y君は泣き出してしまいました。D君は「白いお花紙を全部使って大きなわたあめを作りたかったのに」と主張。K ちゃんは「私もお花屋さんで使うのに」と主張。

譲らない二者のやりとりを見守っていた担任は、こう言いました。「まあまあ、お店やさん同士、使いたいものが一緒だったんだね。じゃあお店の人たちでお話し合いしなきゃ。椅子に座って、材料をどうやって使うかゆっくり話し合いをしてください」
担任は3人分の椅子を用意して、保育室の端にセッティングしました。椅子に座り少しクールダウンしたのか、3人は静かに話し合いを始めました。

保育現場で「協同性」の具体的な事例　3

＜発表会に向けて共通の目的を持つ～みんなで看板製作～＞

5歳児クラスでは、冬の発表会の準備を進めています。発表を見に来てくれるお客さんのために、案内表示の看板を作ることになりました。1メートル×2メートルの大きな段ボールに模造紙を貼り、クラスでひとつの看板を作ります。

どうやって看板作りを進めたら良いか、みんなで話し合いをする時間を設けました。最初は、それぞれに描きたいイメージを発表し、具体的にどうやって進めていくかまでは決まりませんでしたが、保育者が「絵はどうやって描こうか」「誰が絵を描こうか」「どんな文字を入れたら分かりやすいかな」と適宜投げかけることで、具体的な製作方法と役割分担が決まっていきました。

模造紙に描き始め前に、みんなの投票で選ばれたデザイン案を黒板に貼り、完成図のイメージが共有できるようにしました。製作の過程では、気持ちがぶつかり合う場面もありましたが、言葉のやりとりをもって解決し、看板は無事に完成。クラスの共通の目標を達成することができました。

発表会の当日には「あの看板はね、みんなで描いたんだ」と保護者に嬉しそうに紹介する子の姿がありました。

保育現場で「協同性」の具体的な事例　4

＜保育者対子どものやりとりで、気持ちを伝え合う～散歩中の秋探し～＞

「言葉でやりとりを行い、イメージを共有する」というと、4・5歳児の姿を想像しますが、それは乳児期からの積み重ねによって見えてくる姿です。

1歳児のクラスでは、「季節感を楽しみながら散歩をする」が今週の目標。赤く染まった葉っぱやを見つけたり、ちょっと冷たい風を感じながら、近所の公園へ出掛けました。

「みんな、葉っぱが赤いね」と、葉っぱの変化に気づいてほしいと思った新人の担任保育士が声を掛けましたが、子どもたちはあまり関心を示しません。そこで、先輩保育士が「まっかだな～まっかだな～」と、「真っ赤な秋」を口ずさむと、子どもたちも真似て歌い始めました。滑り台の下に落ちている葉っぱを見つけて「先生、まっかか」と教えてくれる子もいました。言葉で具体的なイメージを伝えるよりも、子どもたちが大好きな歌で楽しくイメージを共有することができた事例です。

保育現場で「社会生活との関わり」があらわれた子どもの具体的な姿

＜家族へ感謝の気持ちを伝えよう～年度末のサプライズ～＞

母の日や父の日、敬老の日など家族の人々にプレゼントを贈る機会は年間を通して何度かあります。4歳児の担任のY先生は、保護者へのサプライズを考えました。年度末に1年間の子どもたちの成長の姿をまとめたフォトブックを作り、最後のページには子どもたちから保護者へ感謝のメッセージを添えるつもりです。
集まりの時に子どもたちに提案すると、みんな大賛成。ちょうどひらがなを書くことに興味を持ち始めた子も多く、「手紙を書く」という活動は今の姿にぴったりでした。

しかし、4歳の子どもたちは大人のように自分の気持ちをスラスラ書くことはできません。Y先生は一人ひとりに寄り添いながら手紙を書く時間を設けました。「お母さんとお父さんに、どんなことを伝えたい？」と質問しましたが「うーん、わかんない」と悩む子どもたち。そこでY先生は質問の仕方を変えました。「お母さんの好きなところは？」「お父さんとお休みの日に何をした？」「〇〇ちゃんができるようになったことを教えて」と細かく聞き出し、どんな言葉で伝えるかを子どもと一緒に考えていきました。

フォトブックが完成するまでに予想以上の時間がかかってしまいましたが、サプライズは大成功。それぞれの子どもたちの心がこもったラブレターを読んで、涙ぐむ保護者の方もいたそうです。
感動する両親の姿を見た子どもたちも、照れくさそうにしながらも誇らしそうでした。家族に感謝の言葉を伝えると同時に、自分の成長を認めてもらう経験になりました。

保育現場で「社会生活との関わり」があらわれた子どもの具体的な姿

＜地域の人の喜ぶ姿からやりがいを感じる～ボランティア体験～＞

G町は、地域の緑化計画に力を入れており、駅前や公園の花壇にはいつも季節の花々が咲いています。この年、G保育園の5歳児クラスは、地域の緑化活動に参加することにしました。1年間を通して、子どもたちが駅前の花壇の手入れを担当することになったのです。
担当する仕事は、球根や苗を植えて四季の花壇を作ること。水やりや草取りも定期的に行い、見る人が気持ち良くなれる花壇を目指します。
最初にどんな花を植えるかクラスで話し合い、水やりの順番や草取りのスケジュールを細かく決めていきました。

子どもたちが花壇の手入れをしていると、地域の人々が通り掛かり「いつもありがとう」「花が咲くのが楽しみだね」と声を掛けてくれます。
地域の緑化活動に参加することは、植物の成長を見ることができるだけでなく、地域の人たちが喜ぶ姿も見ることができ、やりがいに繋がります。このクラスの子どもたちは前年度に園庭での野菜栽培も経験していましたが、保育園の中だけでは味わえない達成感を感じることができました。年度末には、「年下のクラスの子たちにも花壇の手入れの仕方を教えてあげたい」という声もあがりました。

保育現場で「道徳性・規範意識の芽生え」があらわれた子どもの具体的な姿

順番を守って遊ぶこと～2歳児クラスのすべり台遊び～

2歳児クラスの秋のでき事です。この日はお天気が良かったので、クラスで近所の公園へお散歩に出かけました。大きなすべり台やブランコなど、保育園にはない遊具があり子どもたちは大喜び。担任保育士は、思い切り体を動かして遊ぶ子どもたちを見守っていました。

しばらくすると、すべり台の階段の近くで喧嘩の声が聞こえました。「〇〇ちゃんが先！」「どいて、じゃま！」どうやら、すべり台の順番のことで喧嘩になっているようです。担任保育士は子どもたちに「順番で登ろうね」と声を掛けましたが、子どもたちにはまだ「ルールを守って遊ぶ」ということが難しいようです。

そこで、保育士は階段の下に大きな円を4つ描き「こちら、待合席になりまーす」と声を掛けました。乗り物の待合席に見立てた発想に、子どもたちは目を輝かせ「乗ります！」「次でーす」と円の中に入りました。一人ずつ階段に登り、「お次は〇〇ちゃん、お待たせしました」と子どもたちを誘導する保育士。こうして、順番争いは収まりました。

1歳児や2歳児にとって、ルールを守ることやお友達の気持ちを考えて行動することは難しいため、遊びの中で楽しく規範を教えていく必要があります。このケースの場合、担任保育士は保育園に帰ってから「公園楽しかったね。すべり台の順番こもみんな上手にできたね」と子どもたちに言葉を掛けました。
こういった経験の積み重ねは、道徳性や規範意識を育むための土台となります。

「言葉による伝えあい」が現れた子どもの具体的な姿

子どもが落ち着いて話し合える環境づくりの工夫～おみせやさんごっこ～

4歳児クラスでは、おみせやさんごっこが流行っています。お花屋さん、車屋さん、床屋さんなど、それぞれの興味に合わせてクラスの中にいろいろなお店ができ上がっています。素材置き場には段ボールや色紙が置いてあり、子どもたちは自由に使うことができるのです。
ある日、Y君とD君が「わたあめ屋さん」を作ろうと意気投合し、素材置き場にある白いお花紙を全部使おうとしました。それを見ていたKちゃんが「全部使うのダメなんだよ！バカ！」と怒り、Y君は泣き出してしまいました。D君は「白いお花紙を全部使って大きなわたあめを作りたかったのに」と主張。K ちゃんは「私もお花屋さんで使うのに」と主張。

譲らない二者のやりとりを見守っていた担任は、こう言いました。「まあまあ、お店やさん同士、使いたいものが一緒だったんだね。じゃあお店の人たちでお話し合いしなきゃ。椅子に座って、材料をどうやって使うかゆっくり話し合いをしてください」
担任は3人分の椅子を用意して、保育室の端にセッティングしました。椅子に座り少しクールダウンしたのか、3人は静かに話し合いを始めました。

保育現場で「思考力の芽生え」があらわれる具体的な姿

＜川の水はどうやったら流れるの？～どろんこ遊び～＞

4歳児クラスの夏のできごとです。この日は園庭の砂場でどろんこ遊びをしていました。K君・C君・Hちゃんは3人でひとつのお山を作り、真ん中にトンネルを掘っています。普段から3人は砂遊びが大好きで、大きなお風呂やお山を作って盛り上がっていました。今日は水を使いトンネルの中に川を流そうと考えたようで、3人は一生懸命です。

しかし、水を流す段階になって言い合いが始まりました。

K「お水が流れない！」
C「Hちゃんが掘ったトンネルが小さいからだよ」
H「やめてよ、トンネルが崩れちゃうから待って！」

3人のイメージ通りに水が流れなかったようです。川に傾斜がついていないため、水がトンネルの中で止まってしまったのです。担任は原因に気づきましたが、あえて伝えず、このように声をかけました。

担任「お水はどうやったら流せるかなあ。いろいろ実験してみようよ」

まずHちゃんが、トンネルではなく山の周りに道を作り、水を流してみることにしました。

K「それ、お城の『お堀』みたいだね。パパと見に行ったことがあるよ」
C「じゃあ、お堀に水がたまるように、山のてっぺんから水を流そう」

今度は山のてっぺんから川を作り、水を流してみました。すると、ジェットコースターのように勢いよく水が流れ、当初の計画とは違うものの3人は大満足。Hちゃんのアイデアで、笹舟を作り、てっぺんから流す遊びが始まりました。

担任は水が流れない原因を分かっていましたが、「坂道にして流せばいいんだよ」と教えることはせず、子どもたちがさらに遊び込む中で自然に発見できるよう促しました。三者の意見が混ざり合い、予想とは違うユニークな遊びが始まった事例です。

保育現場で「自然との関わり・生命尊重」が具体的にあらわれた姿

＜生命への関わり方を自ら考える～おたまじゃくしの飼育～＞

5歳児クラスが散歩に出かけた時、田んぼでカエルの卵を見つけました。初めてカエルの卵を見た子は「ちょっと怖い」「気持ち悪い」と言っておそるおそる眺めていましたが、家で兄がカエルを飼育していたというC君は「カエルの卵だ！おたまじゃくしが生まれるんだよ。虫かごに入れて保育園で飼いたい」と興味津々です。

クラスに卵を持ち帰り、みんなで図鑑を読んで飼い方を調べました。担任が飼育の方法を指示しなくても、C君がリーダーとなって動き、おたまじゃくしの面白さや不思議さは友達にも伝わっていきました。最初は「怖い」と言っていた子たちも、登園すると真っ先に卵の様子を観察するようになったのです。

おたまじゃくしが生まれる頃にはクラス全員が水槽の中に夢中です。そこで担任は、日々変化するおたまじゃくしの形を覚えておけるように、観察日記をつけることを提案しました。

やがておたまじゃくしに脚が生え、もうすぐカエルになろうとする時、飼育に関する方針で言い合いが起こりました。「カエルになったら水槽は狭くてかわいそうだから逃がしてあげたい」という意見と、「死ぬまで飼いたい」という二つの意見がぶつかったのです。
この様子を見た担任は、クラス内で「カエル会議」を開き、子どもたちが話し合う機会を作りました。子どもたちから出た意見をひとつずつホワイトボードに書き、最終的には多数決で、カエルたちを田んぼに逃がすことが決まりました。反対していた子どもたちも生まれた田んぼで元気よくはねているカエルたちの姿を見て「バイバイ！元気でね」とお別れをすることができました。

これは身近な生き物を発見し、飼育し、命との関わり方を考えることができた事例です。このクラスの担任は子どもたちが自発的に行動する姿を見守りました。しかし、すべてを子どもたちに任せて何も働きかけなかったわけではありません。観察日記をつけるように提案したり、数種類の生き物図鑑を図書館で借りてきたり、会議の書記をしたり。5歳の子どもたちが経験を積み重ねることができるように、裏方となってサポートしたのです。

保育現場で「数量・図形、文字等への関心・感覚」が具体的にあらわれた姿

身近な文字に遊びの中で親しむ～かるた遊び～

3歳児クラスのできごとです。最近、子どもたちはひらがなに興味を持ち、絵本や掲示物の中に読めるひらがながあると、指をさして「あ、い、う……」などと声に出して楽しんでいます。また、自分の名前の文字には特に関心があるようで、クラスの誕生日表の中に自分の名前を見つけると「読めるよ」と言って教えてくれます。しばらくすると、自分の名前だけでなく友達の名前にも興味を持ち始めたので、担任は「おなまえかるた」を作りました。絵札には一人ひとりの写真を、読札には「かけっこがとくいなYくん」といったようにその子の名前と特徴を入れて作りました。
読み手の役は順番待ちが続くほど大人気になったので、子どもたちと一緒にかるたをもう一つ作成し、2グループに分かれてかるた遊びができるようにしました。

文字への関心には個人差があります。読み書きに興味がある子は保育者が働きかけなくても、どんどん文字を覚えていきますが、あまり関心を持てない子は遊びにも入っていけない様子です。そういった子のそばに保育者が付き、一緒に読札を読んだり、読める文字の札だけ任せたりするなど、その子の興味に合わせた援助を行いました。

保育現場で「数量・図形、文字等への関心・感覚」が具体的にあらわれた姿

気づきを与えるアプローチ～給食の配膳～

4歳児クラスに進級し、子どもたちは当番制で給食の配膳を行うことになりました。汁物など熱いものは保育者が取り分けますが、主菜や果物などは当番の子どもたちが取り分けていきます。
この日は献立の中にいちごが入っていました。給食室の職員に「ひとり2個ずつだよ」と言われ、G君は数を「1個、2個……」と数えながら皿にいちごを置いていきます。全員に配ったところで、10個ほどいちごが余ってしまいました。さらに1つずつ配ろうとするG君に対し、担任が声をかけました。
「G君、みんなの数といちごの数を先生と一緒に数えてみよう」
1、2、3……と人数を数えると、全員で22人。「あ、いちごが足りない！」とG君も気づいたようです。果物が大好きなG君は、給食室の職員に「まだいちごはありますか？」と聞きましたが、出しているだけでおしまいとのこと。
余ったいちごは、完食したお友達がおかわりできることになりました。

この場面で担任は、10個のいちごを取り分けようとするG君に声を掛けました。「G君、いちごが足りないからもう配らなくてもいいよ」と伝えて行動を止めるのではなく、一緒に数を数え、G君の気づきを促したのです。

保育現場で「言葉による伝え合い」が具体的にあらわれた姿

子どもの話に耳を傾ける～日々の保育の中で～

2歳児クラスにはお喋りが大好きな子どもたちがたくさんいます。担任のK先生は、子どもたちが喋る時に、必ず腰を落とし、同じ目線になって耳を傾けるように気をつけています。週末にお出かけしたこと、ペットの話、友達との遊びのこと、絵本のこと……友達どうしの言葉のやり取りはまだ十分にできないけれど、みんなそれぞれ伝えたいことを言葉にしています。

言葉で伝え合う力を育むためには、子ども自身が「自分の話をきちんと聞いてもらった経験」が必要です。家庭の保護者や保育者、地域の大人が聞き役となることで、「話をちゃんと聞いてもらえた」「話していいんだ」という肯定感に繋がるのです。

日々の保育の中でK先生はメリハリも大切にしています。朝の会や午睡の時間など、静かにすべき時はお喋りはしないという決まりを徹底し、その代わり、自由遊びの時間には一人ひとりの話をしっかりと聞いて会話をするように意識しています。K先生は自分の姿勢を一緒に組んでいる後輩やパートの先生にも伝え、一貫した働きかけを行っています。

保育現場で「言葉による伝え合い」が具体的にあらわれた姿　2

子どもたちから活発に意見が飛び出すような工夫～劇遊び～

5歳児クラスでは発表会で劇遊びをすることになりました。劇の題材決め、配役決めのほか、劇に必要な道具を考えたりするための話し合いの機会を設けました。5歳の子どもたちは会話でやりとりをし、自分とは違う意見を持つ子の話も最後まで聞くことができ、スムーズに話し合いは進んでいました。

しかし「劇を成功させたい」という一つの目標をみんなで共有し、練習を重ねていく中で行き詰まりがありました。「Tちゃんの声が小さく、お客さんまで聞こえない」という意見が出たのです。
クマの役を選んだTちゃんは一生懸命練習に取り組んでいるのですが、小柄な体格のためか他の子よりも声が小さいのです。他の子から「Tちゃんもっと頑張って」と言われ、泣きそうになってしまいました。

ここで担任が話し合いに参加し、
「Tちゃんは声が綺麗だから、小鳥さんやうさぎさんの役もできそうじゃない？」

Tちゃんに提案しましたが、どうしてもクマ役がやりたいとのこと。
そこで、同じクマ役を担当するMちゃんが提案しました。

「Tちゃんが喋るところ、"せーの"で二人で言ったら大きな声になるんじゃない？」

保育現場で「言葉による伝え合い」が具体的にあらわれた姿　3

保育の中の表現の機会～給食参観～

4歳児クラスの給食参観でのできごと。この日は年に一度、保護者も一緒にテーブルを囲んで給食を食べることができる日です。参観日のメニューはカレーライス。トッピング用に、お花型にくりぬいた茹で野菜やチーズなどが用意されていました。

担任のY先生が、事前に給食参観の流れについて子どもたちに説明していると、「お父さんやお母さんの給食を自分で盛りつけたい」という提案がありました。せっかく自分たちで盛りつけるのであれば、その過程も楽しいものにしたいと考え、給食室の職員にトッピングを用意してほしいとお願いしたのです。

盛りつけを始めると、お花のにんじんをたくさん散らしたり、全種類のトッピングを使ってみたり、個性豊かなカレーライスができ上がりました。食べる前には、保護者から我が子へ一言感想を言う時間が設けられ、和やかな雰囲気の中で給食を食べることができました。

日々の保育の中にクリエイティブな活動を織り交ぜることで、子どもたちが表現する機会が増えていきます。表現をして終わりではなく、他者の前で発表して認めてもらったり、自分の表現を後から見返すことができると、子どもの「また表現したい」という気持ちにつながります。
給食参観で子どもたちが盛りつけたカレーは、1つずつ写真に残してクラスに飾ったそうです。

「表現」とは絵や歌だけではなく、心の中で感じたことを表すこと

「表現」とは、歌や劇の発表だけではありません。日々の保育の中で子どもたちが感動する体験を通し、思わず言葉が出たり、体が動いてしまったりすること自体が「表現」です。
保育現場では、運動会や発表会などの行事に向けて「見せるための表現」を作り上げることに必死になりがちです。しかし、一番大切なのは子どもたちが楽しく表現をしているかということです。保育者が教えた通りに絵画を描くのではなく、心の中で感じたことがその作品の中にきちんと表れているか、というところを見ていきましょう。